細江カトリック教会だより　６月号

〒750-0016　下関市細江町 1-9-15　083-222-2294　083-222-0970
ホームページ　http://hosoechurch.sakura.ne.jp

これからの日々

公開ミサ休止が解除され、ようやく共にミサを捧げることができるようになりました。しかし、まだ、全員が参加できる状態ではありません。教区によっては、まだ公開ミサができないところがあり、国外に目を移せば、南米やアフリカのように感染拡大はまだこれからという地域もあります。

今わたしたちが置かれている状況に感謝するとともに、あらためてこの３か月が何であったのか考えてみたいと思います。新型コロナウィルスの感染拡大とそれに伴う様々な問題を、ただ過去のこととして葬り去るのではなく、わたしたち人類社会が直面した貴重な経験として位置づけることは、将来のためにも大きな財産になるはずです。すでに日本社会には、このコロナ禍を「人間性を判定するリトマス試験紙」であるととらえ、今まで当然と思っていた人間関係、働き方、社会全体の在り方を考える好機だと考える識者がいます。教会に集うわたしたちは、そうした見識に学びながら、さらに、み言葉によって養われた民として、もっと深く受け止めることができ、また、そうする務めがあるのではないでしょうか。

イスラエルの民は昔、エジプトの圧制から解放されて約束の地に入る前に、人間が生きるための限界状況とも言うべき**砂漠**での生活を強いられました。そこで、飲み物も食べ物にも事欠く日常の中で、**神への信頼**を何にもまさるものとして生きることを教えられました。約束の地に入って、次第に豊かになり、王制を布き周囲の国々に覇権を広げるまでになりますが、そこで、生じた国の分裂、さらには、大国の侵攻を食い止めることができず、バビロンへの連行、異国での捕囚という忌まわしい経験をすることになります。そうした状況の中で、預言者たちが繰り返し説いたのは、先祖たちが過ごした砂漠での経験でした。すべてを導かれる**神に立ち返る**こと、自分たちの力、知恵に頼るのではなく、すべてを超える**神に信頼を寄せて**生きること、それが苦い経験を通して、イスラエルの民が学んだことです。

新型コロナウィルスの感染によって、突然、慣れ親しんできた日常を断たれたわたしたちも、あらためて人間存在そのものが抱える弱く、はかない現実を思い知らされました。そして、それが一人の人間の問題ではなく、人類すべてに共通する現実であること、しかも、自分が周囲の影響を受けるだけでなく、無意識のうちに周囲に対して影響を与える存在であることを学びました。かつて、イスラエルの民が、自分たちの力で築いた栄光に酔いしれ、傲慢になり、自ら亡国という最悪の災禍を招いたように、わたしたち人類も、極度に発達した技術と情報を手に入れて、すべてを支配下においたかのような錯覚をいだいてきた状況の中で、今、真剣な振り返りを求められているように思います。

しかし、こうした振り返りは、神が人類に罰をもたらしたという結論に導くものではありません。それどころか、そのような愚かな、自分中心的で、かたく

な人間を神がお見捨てになることなく、かえって、より豊かな命へと導いてくださることを教えられるのです。傷つき倒れ、絶望しかけた人間、他者を恨み、責任を転嫁しようとし、犯人探しに躍起になる人間、病者の苦しみに共感することなく、傍観者として、もっぱら他人の批判を繰り返す人間、そうした人間を神はお見捨てになることはありません。感染症との付き合いはこれからも続きます。災禍を通して、恐れではなく、自らの弱さを知る、打ち砕かれたものとして生まれ変わった人間を、神が心にかけ、喜びに満ちた宣教者にしてくださるよう祈りましょう。

作道 宗三 神父

地区だより Ⅱ

中央地区

いつもの年なら四旬節・ご復活・聖霊降臨と今はその喜びを味わう時期と思いますが、今年はかなり違っています。YouTube で広島教区のごミサに参加してもなぜか心は晴れません。

細江ではグループ毎のミサで、何ヶ月ぶりに６月１４日にＢグループの皆さまと共にミサを捧げることができました。

ディン神父さまの久々のベトナム語のお話、オルガンの音色が心にしみました。地区会も定期的に集まっていましたが、今はそれもできません。
でもこんな時だからこそ、一人で祈ることの大切さを教えていただいた気がします。

イエスさま、マリアさまが両手を広げていつも待っていてくださることを信じつつ、その日を待ちましょう。
祈りながら・・・。

永松 和子

天使幼稚園勤務　シスター紹介

私は、1980 年 8 年くらいフィリピンのミンダナオ島に暮らしたことがある。分散して暮らしている村人の訪問には、リュックを背負って 5 時間くらい歩かなければならなかった。時々村人が馬を貸してくれるという幸運なこともあった。村の若者のさっそうと馬を走らせる姿に、いつの日か私も、と夢見ていた。なぜなら私は午年なのできっと馬が合うと思っていた。手綱は勿論なく、馬の背に鞍とは名ばかり、収穫したトウモロコシを入れるビニール袋が載せているだけ。私が乗り手だとわかるとトウモロコシ畑を通る度にわざと止まってそれを食べる。そのうち急な登り坂に差しかかった時、馬の背から滑り落ちて運悪く木の切り株の上に落ち、目から火がでるかと思うくらい痛い思いをしたことは忘れられない。

それから、かれこれ 40 年も経ち人生の黄昏時になった今、私は馬に代わって軽４輪を走らせて小野田から通ってきている。

「壇ノ浦古戦場」にさしかかると「源平合戦」が気にかかり潮の流れに目が向いてハンドルが揺れる。そのあたりからは狭い急カーブの連続で、天使幼稚園に着くまで抜きつ抜かれつのオートレースが始まり幼稚園の坂を急カーブで登りきるまで手綱はゆるめられない。

園児たちは、私に不思議そうな顔で、「おばあちゃん　誰のおばあちゃん？」「ここに何をしているの？」「僕のおじ

いちゃんは65歳だよ。あばあちゃんは何歳？」と、てんでに聞く。彼らは自分の年の数しかわからないので「まだまだ上よ」と答えれば充分。「お仕事は、お花を植えることよ」と答えると納得顔。花を植えることは私の趣味ということではないが、幼稚園で花の世話が出来る暇のある人は私しかいない。それでそれが私の仕事となった。

天使幼稚園の職員たちは元気で明るい。コロナ禍でも決して弱音を吐かない。こんな危機だからこそ、見えない現実を受け入れ、子どもたちを全力で守っていこうとする先生たちの姿は頼もしく尊い。

コロナ以後、世界も日本も大転換を迎えるだろうといわれているが、未来に生きる子どもたちの倖せのために戦う人々と共に生きることは私の大きな喜びとなっている。

キリスト・イエズスの宣教会
田中　靖子

アドルフォ・ニコラス神父さま帰天
2020年５月20日

1993年から1999年の間、イエズス会管区長のニコラス神父さまは、イエズス会士の訪問のため、度々下関に来訪されていました。

金曜日のミサ後、Baby 室でお話を伺ったことが記憶に残っていますが、お話の内容は覚えていません。素敵な、優しさが滲みでていたお姿だけは覚えています。私だけでなく信徒の皆さんもそう思われたことでしょう。

皆さまは、ニコラス神父さまの祈りをご存じでしょうか？
総長様にもなられた神父さまですが、人の弱さと主イエスへの親しみを感じさせ、私たちにも共感できるような素直なお祈りです。お祈りの一部を紹介させていただきます。・・・

『世の終わりまでともにいてくださる約束をどうか忘れないでください。』

祈りの最後の部分**『私たちは、弱く、罪深いものですが、あなたの友なのです』**・・・切々と主イエスに語りかけることばが、心に響きます。

ニコラス神父さま、永遠の愛の中で憩われることを・・・。

近藤かつみ

６月の説教より
キリストの聖体　６月１４日（日）

本日はキリストの聖体の祭日を迎えました。福音書は、主イエスが５つのパンと２匹の魚を５千人以上の群衆に分け与えたという出来事をきっかけにして、パンをめぐる主イエスと人々の対話が始まって、いのちのパンについて話してくださったという箇所です。

（中略）

最も大切なこと、最も福音的なことは、「わたしが命のパンである」ということです。主イエスが言われたのは、「私は命のパンを持っている」ということではなく、「わたしが命のパンである」ということです。これを注目してほしいと思います。命のパンとは、主イエスがもっておられる何か、つまり教えとか、力とか、愛とか、そういったと一部のものを指すのではなく、主イエスという人格的な存在そのものが、命のパンであるということなのです。

主イエスの教えを学ぶこと、奇跡的な救いを体験すること、神の愛に触れること、それぞれが本当に素晴らしい体験であります。しかし、その素晴らしい体験ですらも、主イエスの命から溢れてくる恵みを部分的に体験したということに過ぎません。主イエスが私たちに願っておられることは、そういう素晴らしい体験を通して、主イエスと私たちが一つになることです。主イエスの命が私たちの内に生きるようになり、主イエスの命のうちに私たちが生きるようになることなのです。

主イエスは言われた。「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる。わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物だからである。」

肉を食べ、血を飲むということが、何度も繰り返されています。主イエスの肉を食べ、血を飲んで永遠の命を得ることができるのだというわけです。そして、その永遠の命とは、私たちが主イエスのうちに生きることであり、主イエスが私たちのうちに生きてくださることだと言われています。

だからこそ、大病があっても、災害があっても、主イエスがすぐそばにいてくださり、私たちのうちに生きてくださると言う事を信じるならば、それらの苦しみを超えて、永遠の命を味わうことが出来るでしょう。主イエスは命のパンであるからです。主イエスの肉を食べ、その血を飲むならば、すなわち主イエスの命、主イエスの存在を受け取るならば、全ての苦しみを克服することができると思います。

どうか毎回のミサを通して、私たちは主イエスの肉と血すなわちまことの食べ物、まことの飲み物を深く味わうことができますよう、そして主イエスのように苦しんでいる方々に自分の命を捧げることができますよう、この恵みを一緒に願い求めたいと思います。

ディン神父

一杯の愛のお米プロジェクト

コロナ禍において生活困窮の状況にある在日ベトナムの方々への食糧支援「一杯の愛のお米プロジェクト」は、広島教区の方々をはじめ、日本全国の方々の寄附金と食料の寄付によって、2020 年６月 15 日現在でおよそ 500 名の西日本在住のベトナムの方々に食料を届けることができました。

心より感謝申し上げます。

このプロジェクトは、６月２０日の発送をもって一旦締めることになりました。

500 名の方に食料を届けるためには、相当の食料と郵送費がかかります。実行できたのはひとえに皆様の真心、優しさ、ご協力によるものです。本当にどうもありがとうございました。

最後の食料発送後、あらためて詳細を報告させていただきます。

皆様お一人お一人に感謝の祈りを捧げさせていただきます。

中井 淳神父（下関労働教育センター）
ディン神父（細江教会）

＊5 月から毎週土曜日、発送に向けて頑張りました！